



日本文学全集 11



武者小路実篤
友情 愛と死
その妹 人生論 他



河出書房

日本文学全集 11 武者小路実篤



© 1967

責任編集

武者小路実篤 川 端 康 成
石坂洋次郎 山 本 健 吉
瀬 沼 茂 樹

昭和42年 7 月 20 日 初版発行
昭和55年 5 月 15 日 10版発行

著 者 武者小路実篤
発 行 者 清 水 勝
印 刷 者 草 刈 龍 平
装 幀 原 弘

印刷・中央精版印刷株式会社
製本・中央精版印刷株式会社

発 行 所 東京都渋谷区 株式 河出書房新社
千駄ヶ谷2-32-2 会社

電話東京03—404 1201 営業
404 8611 編集
振替口座 東京 0—10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価は帯にあります



「僕」

草野 心平

或る用件をお願いするために、ずっと以前、三鷹の武者小路家を訪ねたことがあった。その用件を武者小路氏は容れて下さった。それが氏の聲咳に接した最初である。氏の名前を知ってから、その時は大体四十年もたってからだったろう。広州の大学の図書館で『或る青年の夢』の中国訳を見つけたのが氏の名前を知った最初だった。大きくはない応接室でお願いの用件がすむと武者小路氏は、ふと何か思いつかれたらしく、突然たつて奥に行かれた。その時グルグル巻きした兵古帯が廊下まで垂れて、それに氏は気がつかず、帯はしおれた尻っぼのように引きずられて、消えた。だらしない、という感じ

は微塵もなかった。天衣無縫、それこそホントの天衣無縫という感じだった。

NHKの「朝の訪問」というのを半年やったことがある。十年程前のことだ。その頃の或る日録音のために調布のお宅を訪ねた。終ってから沸き水の池の鯉を見せてもらった。見事な鯉や虹鱒などが泳いでいたが、氏は極く無造作にエサを投げ与えた。与えたといつては誤弊がある。パラパラッとただ投げた。それもまた天衣無縫の感じだった。

私も現在魚類を飼っているが、それらを馴れさせようという、さもし根性が底にあって、客が来たりすると、こんなになぜいているんだというところを見せなくなる。ところが武者小路氏はちがう。魚は魚で自由であれ、といった天然の愛で接していた。魚たちは奴隷ではなく対等だった。小動物との馴れ合いを得意がらみみっちい考えなどは初めっから微塵もない、もっと茫洋とした愛がその界限にたちこめていた。

「新潮」に連載中の『一人の男』を私は愛読しているが、私にとっては『或る青年の夢』からはじまつての氏の自伝的内部生活を、或る程度には垣間見た積りである。そして初め頃から今に至るまで終始私にとってそれは全く稀有な文学であつた。よく言われる稀有ではなくて、その言葉が生れたときの新鮮斬鬼な呼吸のはげしい稀有さである。恐らく武者小路氏のような文学は世界のどこの国にもないだろう。日本の文学史上にも無論なかつたし、これから生れはしまい。

『一人の男』の主人公は、相変らず平凡素朴な「僕」という話し言葉の一人称で自らの経験を告白する。なんとたびたび私たちは、武者小路氏の「僕」にであつただろう。私は飽かなかつた。その度ごとに「僕」は私には新鮮だった。「僕」という言葉が象徴するかのような、簡明率直な文体のなかに、いつも思いもよらない深淵があつて、私はそれにひかれた。そのまた「僕」はコマギレの時間に生きることのまづさによつて、ひどく永生きする命運をもつ「僕」である筈だ。

(詩人)

何でもないような文章

安岡章太郎

書けなくなつたら、武者小路を読むがいい、と或る先輩の作家におしえられた。何でもないことでも、書けないと思ひ出すと書けなくなる、これが武者さんのものを読むと、何でもないことなら、何でもないように、そのとおりに書いて、ちゃんと何かしらになつてゐるからね、というのである。

私は別に、その先輩作家におしえられたことを実行したわけではない。ただ、なるほどと思つた。たしかに武者小路氏は何でもないことを、何でもないものとして書く術を持っている。私たちが、ものが書けなくなるのは、こうした術を何処かへ置き忘れてしまふせいかもしれない。

しかし、何でもないことを何でもないように書く、

武者小路氏がただそれだけの作家でないことは、いうまでもない。何でもないことを何でもないように、無技巧に書いて、人を動かすことが出来るのは、武者小路氏のイデが技巧を必要としないだけのことである。問題は凡庸の者にそのようなイデがあるかどうかである。私たちが書けなくなるのは、自分の考えていることに自信が持てないからである。それを無技巧にたよって乗り切れるわけはあり得ない。

実際、武者小路氏自身はハッキリそのことを見抜いてをり、氏の



調布の自宅庭にて

昭和42年5月25日

文章が無造作に見えるのは、技巧によつてゴマ化することをしているだけだ。たとえば『世間知らず』のなかに描かれた女の顔や、

情欲の場面の強烈な印象は、一般の情痴作家と称せられる人の描写力をはるかにしのいでいる、と私には思われるのである。夏の鎌倉の真昼の草むらは、それ自体で一個の情欲として訴えかけてくるように描かれており、自然の生殖作用が人間にはたらきかけてくる力といったものが、何等の説明も註釈もなしに、ひとりでに読む者のなかに伝わってくる。情交のもたらす緊張や、重みや、疲労や、倦怠やは、その燃え立つような草むらの暑苦しさのなかに、充分に描きつくされているといつていい。

それにしても『世間知らず』は何という陰気な恋愛小説だろうか。田山花袋の『蒲団』や、島崎藤村の『新生』など、当時の自然主義作家の告白的自伝小説と同じような陰気さが全体にみなぎっていて、それがこの小説にリアリティーをあたえている。主人公は恋愛の相手の女に、顔色の悪い、青くてツヤのない皮膚や、あぶら汗や、にきびや、そういった醜いものだけを見ており、しかもその醜いものに無意識のうちに強い力で引っぱられて行く。この醜さは何処からくるか？

勿論、醜いものは女の側だけにあるのではなく、そ

れに引かれてゐる主人公の側にもある。というより、主人公が自分自身の醜さを意識しているところから、女の顔に醜いものばかりを汲みとることもなるのである。鎌倉からの帰りがけ、東京駅で一等車の戸口から降りたところを駅員に見咎められる場面は、そういう主人公の自己嫌惡を、じつに端的に、正確に、しかもさりげないかたちで擱まえていると思う。

駅員の官僚的な態度は不愉快なものに違いない。しかし、ここでは駅員の小役人根性は、単に駅員だけのものではなく、じつにもっと広く世間一般の人の眼や、ものの考え方を代表しているというべきだろう。だから、それは世間知らずの主人公を、ことのほか強く傷つけてしまうわけだ。暗いプラットフォームで、些細な葛藤が、強い印象を残すのはこのためである。そして全体に暗く陰鬱だったこの小説が、この小事件を経過してからいくぶん明るくなるのも、主人公がここで小なりといえども「世間」の風に吹かれ、自分の眼を外側へ向けて、世間に対峙する姿勢がうかがわれるようになるからであろう。

「自分は漱石氏がいつまでも今のままに、社会に対し

て絶望的な考へを持つていられるか、あるひは社会と人間の自然性の間にある調和を見出されるかを見たいと思ふ」

これは武者小路氏が「白樺」のたぶん創刊号によせた漱石の『それから』に対する批評である。『それから』の主人公代助が当時の白樺派の人たちの生活態度に非常に良く似ていることは、誰にでも明らかであるだけに、武者小路氏のこの批評文は、漱石への回答であるとも受け取られる。武者小路氏が『世間知らず』で、「社会と人間の自然性の間にある調和を見出」しているかどうかはともかく、これは何でもないようなことを、何でもないように書いたなどと言われる作品でないことは、たしかである。

(作家)

好評発売中

第15巻

路傍の石・真実一路 山本有三

屈服を克服に変える強い意欲で、人生にひるまず立ち向ってゆく人間を描いた若い魂への二代表作

目次

友情	三
愛と死	七
その妹	一四
愛慾	二七
だるま	二七
或る日の一休	二五
人生論	二五

年譜

三三

文学入門

瀬沼茂樹 元一

作家の横顔

武者小路有紀子 四五

友

情

自序

人間にとって結婚は大事なことにはちがいない。しかし唯一のことではない。する方がいい、しない方がいい、どっちもいい。同時にどっちもわるいともいえるかも知れない。しかし自分は結婚については樂觀しているものだ。そして本当に恋しあうものは結婚すべきであると思う。しかし恋にもいろいろある。一概にはいえない。この小説の主人公は杉子と結婚しなかったために他の女と結婚したろう。そして子が生まれたろう。その子が男で、大宮と杉子の間にできた女の子を恋して結婚するということも考えられないことではない。そして両方がお互いに生まれたことを感謝しあうということもあり得ないことではない。

夫婦のことはどこか他のところで書こう。

自分はここではホイットマンの真似して、失恋するものも万歳、結婚する者も万歳といっておこう。

一九二〇・一・一四

実 篤

上 篇

一

野島が初めて杉子に会ったのは帝劇の二階の正面の廊下だった。野島は脚本家をもってひそかに任じてはいたが、芝居を見ることは稀だった。この日も彼は友人に誘われなければ行かなかった。誘われても行かなかったかも知れない。その日は村岡の芝居が演られるので、彼はそれを読んだ時から閉口していたから。しかし友達の仲田に勧められると、ふと行く気になった。それは杉子も一緒に行くと言ったので。

彼は杉子に逢ったことはなかった。しかし写真で一度見たことがあった。それは友達三四人とうつした十二三の時の写真だったが、彼はその写真を何気なく何度も何度も見ないわけにゆかなかった。皆の内で杉子はずばぬけて美しいばかりではなく、清い感じがしていた。彼はその写真を机の前に飾っておいたら、きつといい脚本がかきたくなるだろうと思った。しかし彼は仲田に写真が

くれとは言えなかった。そしてその後仲田のところへ行ってもう一度その写真を見せてもらうことはできなかった。そして当人にも逢うことはできなかった。一度、声を聞いたことがあるように思った。しかしそれは杉子ではなく、杉子の妹の声だったかも知れなかった。

彼が帝劇に行った時はまだ少し早かった。彼は廊下に出て今に仲田が妹をつれてくるかと思った。それを心待ちしていたが、若い女をつれてくる男が仲田ではないと、かえって安心もした。

彼はその時、村岡が友達二三人と何か声高に話しながらくるの出あった。彼は村岡とはある会で一度あったことがあるが、目礼めれいをしたりしなかったりする間がらだった。そしてこのごろは逢っても知らん顔をすることを努めていた。それは彼が村岡のものをよく悪口言ったからである。今日やられる芝居も彼は公にではないが、かなり悪口言った。もとよりそれは文学をやる仲間同志で言ったので法科に行っている仲田とはほとんど文学の話はしなかった。仲田は彼が村岡のものを嫌きらっているなぞということは知らなかった。新しいものだから、それに評判のいいものだから彼はきつと見にゆくだろうときめていた。それで説明掛がかりぐらいに彼をつれて芝居を見ようというのだった。彼はそれに気がついていて、そしてそれを迷惑にも思った。しかし断わる気にはなれなかつ

た。

彼は村岡と顔を見合わせた。両方がお辞儀じぎしたそうにも見えた。しかしどっちも自分の方からさきにお辞儀しようとはしなかった。お世辞のように思われるのもいやだったのだろう。あるいは先にお辞儀して相手に見くびられるのがいやだったのだろう。少なくとも村岡は彼より四つ五つ上で、世間にももう認められていた。彼は五つ六つ短い脚本をかいだが、誰にも顧みられなかったのは事実だ。しかし彼は自分の方から頭をさげるには、相手を軽く見ていた。

とうとうお辞儀せずに村岡は通りすぎた。彼がふとふり返った時、村岡は友達と彼の方をふり返って何か言っていた。

「あれが野島だよ」

「あれか。くだらない脚本をかく奴は」

そんなことを言っているように思った。そして急に不快を感じながら顔をそむけると、向こうから仲田が、妹の杉子とやって来た。

写真よりはずっと大人おとならしくなったと思った。だが若若しく美しかった。

「もう君は来ていたのか」

「ああ、少し前に」

「これが野島君だ。僕の妹だ」

二人は黙っていいいにお辞儀した。

二

野島は杉子とはほとんど話をしなかった。杉子が芝居を感心して見ているらしいのに不愉快を感じた。しかしそれは無理もないと思つた。仲田も感心しているようなことを言つたが、それはむしろ彼にたいするお世辞のように見えた。

「やはり新しいものは、我々に近い感じがするね」

そんなことを仲田が言つた時、彼は別に反対する気にはなれなかった。

「飯を食おう」

仲田はそう言つて先にたつて行つた。三人は向かいあつて飯を食つた。仲田の妹は野島のいるのを別に気にはしていないらしかった。しかしほとんどしゃべらなかつた。そして二人の話を別に注意して聞いてもいなかった。それよりは同じ齡ごろの女の人が居ると、その女の方を注意しているようだった。

野島はそうはゆかなかつた。彼は杉子の誰よりも美しいことを感じた。そして杉子のわきにいることをこたわらないではいられなかつた。いつも仲田には不遠慮になんでも言えた彼が、今日は何一つこたわらずには言えなかつた。村岡のものの悪口も彼は思い切つて言えなかつた。

た。しかし彼は心のうちによるこびを感じた。そして呑気なことばかり、いつもより調子にのつてしゃべつた。それがまた彼には卑しいように思えたが、心のよろこびはややもすると言葉となつて、あふれ出てきた。そして杉子が少しでも笑うと彼は幸福を感じた。やがて幕のあくリンが聞こえても彼はいつまでもそこに腰かけていたかつた。

しかし杉子はあわてて立つた。

二人もあとをついて芝居を見に行つた。彼はもう芝居は気にならなかつた。ただ何げなく杉子の顔を見る機会をつくることに苦心した。ここに自然のつくつた最も美しい花がある。しかも自分の手のとどくかも知れないところ。しかし彼は杉子と一言も話す機会をつかめなかつた。ただ兄と話すのを聞いて、快活な、思つたことはなんでも平気で言う質だと思つた。そしてはつきりものを言う頭のわるくない女だと思つた。

次の幕の間に彼は、とうとう聞いた。

「君の妹さんはおいくつだ」

「十六だ。まだほんとうの子供だ。背ばかり大きいが」

「そうか、僕はもう十七八位かと思つた」

彼はほんとうはもう十九か、二十ではないかと思つてゐた。十六ならまだ安心だ。自分と七つちがいだ。自分が少し有名になる時分に、ちょうど十九か、二十になつ

ている。

彼はそんなことまで考えていた。彼は女の人を見ると、結婚のことをすぐ思わないではいられない人間だった。結婚したくない女、結婚できない女。これは彼にとつては問題にする気になれない女だった。

そういう女にいい女がいると彼は一種の嫉妬さえ持ちかねなかった。女は彼にとっては妻としてよりほか、値のないものだった。結婚が彼にとってすべてであった。女はただ自分にだけたよってほしかった。

そういう彼が杉子を見て、すぐ自分の妻としての杉子を思うのは当然であった。彼はそういう女を求めている。そして杉子がそういう女ではないかとひそかに思っていた。ところが事実は理想的以上に見えた。自分には少しもつたいなすぎるようにさえ思えた。そして仲田が、その女を自分の妹あつかいし、馬鹿にしているのもつたいないことをする奴だくらいに感じた。

その晩、帰っても杉子のことを思わないわけにはゆかなかった。

三

二三日たっても彼は杉子のことを忘れなかった。かえってますます理想化してきた。彼は自分の心の平静を失いかけた。次の日曜の朝に彼は仲田のところに出かけて

みたが、杉子らしい声さえ聞こえなかった。彼は仲田と話しても杉子のことには気をとられて、つい仲田の言うことを聞きもらすことさえ多かった。そしてなんとなくおちつかなかった。仲田とはロシアの過激派について話していた。

「食うに困れば人間はなんでもする。日本だって今よりせめて倍も米が高くなれば黙っていたって皆、過激派になる。圧迫しきつても、どこかにすぎはあるものだ。ロシアに過激派の起こつたのは当然だ。またそれに反対するものが出るのも当然だ。当然と当然がぶつかって、殺しあうのも当然だ。だがそれですます米がたかくなるのも当然だ。この当然をどこかで切りぬけて、皆に飯を食えるようにするのが問題だ。まあ、見ているより仕方がない」

仲田はそんなことを言っていた。

「当然だが、だんだん血なまぐさい方に、加速度に進んでゆきそうだ。それも当然だ。しかしもう皆、平和にあらがれているだろう。今偉大な人間が出てきて、それが民衆の希望と一つになれば大したことができる。しかしそれは想像以上の事実で、ロシアには人物もたくさんいるだろうから、今に事実によってある解決を与えてくれるだろう。その解決を与えてくれるもので、世界の思想が、大きな影響を受けるだろう。自分はレニンや、トロ

ツキー以上の人物が今に頭をもちあげると思う。どこか思いもかけない所で」

野島はそんなことを言ったが、心はほかにあって、いつものように興奮することはできなかった。何かもの足りない。何かおちつかない。彼は立ったり、坐^{すわ}ったりした。いろいろの本をもちだしてはひろいよみした。

「君はどんな人間を尊敬する」

仲田は不意にそんなことを聞いた。

「君の妹さんのような方を」と彼はふと言いたくなかったが、まさか口には出せなかった。

「僕は、やはり、正義の観念の強い、意志の強い、信じてることを行なう人間が好きだ。しかしできるだけ他人の運命を尊敬するものが好きだ。何と言ったって聖人や、神のような人は偉い。一時的の波瀾^{はらん}のために浮き沈みする人間に尊敬することはできない。それから惨酷な冷たい人間は嫌いだ。いつも損をしないことばかり考えているのも嫌いだ。どこかに人間のおもしろみが出なければ」

この時、隣りで杉子らしい笑い声が聞こえた。しかしそれはすぐ消えて、向こうの室に行ったらしかった。

「君の理想はどうだ」

「僕は迷っている。今の政治家の考え、今の法律の基礎は、ずいぶん白蟻にたかられている気がするよ。これから

の政治家はどう手をつけていいかわからない。目的は世界中の平和、人類の幸福にあることはわかっている。それをまた乱さずに国民の幸福を樹立しなければならいこともわかっている。富の不平均も、殊に食えない人間の運命を今のままにしておくことのよくないことも知っている。しかしそれをどうしたら一番いいか、それはわかっていない。第一官吏になる気もないし、実業家になる気もしない。学者になりたい気もあるが、嵐の中にじっとおちついて室にこもっているのが、本当か嘘かもわからない。実際、今の法科の学生は自覚をちゃんとつかんでいる人は少ないだろう。何かに動かされてはいるだろうが、それで皆議論は多いがね」

仲田は野島がうわの空で聞いているのがわかったか、話をぶつとやめた。

「なんでもいいさ。ぶつかればわかるだろう。皆その人のもっている価値だけきり發揮できないのだからね」

四

野島は昼までいて、仲田の家を辞した。杉子にはとうとう逢えなかった。彼はなんだかものたりない気がして四つ角を右に曲がった。すると十五六間さきから杉子が、生花をならいに行つた帰りと見えて葉蘭を油紙につんで持つて帰ってくるのに出あった。彼は不意なので

びっくりして、立ちどまった。そして気がついて歩き出した時分に、杉子は近づいて来て少しほほえみ加減にあいさつした。彼もあわてていねいにお辞儀した。彼は何か話しかけたかった。しかし言葉は出なかった。

杉子は通りすぎた、彼は夢中で、二三十歩歩いてふりかえった時、もう杉子の姿は見えなかった。しかしこのわずかなことが、急に彼を別人のように快活にさせた。物質論者に言わすと、ここに何か知らない物質が、恋する者から厚意を見せられると、血管のなかに生ずるらしい、人はその時おのずと快活にならなければならぬ。野島は二十三にはなっていたが、女をまだ知らなかった。

野島はこの気持を自家に帰してももっていた。そして誰かに杉子のことを讚美して話したい気になった。彼はもう杉子のいる人生を罵る気にはなれない。彼は自然がどうして惜し気もなくこの地上にこんな傑作をつくって、そしてそれを老いさせてしまいかわらない気がした。

ともかく彼は日本の女のうちに、ことに自分の近い所に、杉子のような女のいることを讚美し、感謝したい気になった。日記にこんなことをかいた。

「人生は空かも知れないが、そして色即是空かも知れないが、このよろこびはどこからくる、このよろこびを我

等に与えてくれたものに、讚美あれよ」

彼は家にじっとしてはいられなかった。どこかに行かないと、おちつかない気になった。彼は一番親しい大宮を訪ねることにした。

うちにいるといいがと思ったら、やはりうちにいた。

その友は小説をかいて少しずつ世間に認められて来、彼のものよりはいつもほめられていた。このことは彼を時に淋しくさせた。しかし大宮との友情はそれで傷つけられるわけはなかった。お互いに尊敬していた。大宮はこれに彼の作物に厚意を見せ、世間が悪口を言う時は、淋しがる彼を慰めることに骨を折った。野島はそのことを思うと涙ぐみたい気さえした。彼が当時自信のある作をあつめて本を出した時も、大宮が自分の本でも出すように骨折ってくれた。そしてその本がある人からさんざん悪口言われた時、大宮は彼を祝して、

「君は前に復讐を受けているのだ。君ほどよわらなくていい人間はないと思う」

と言ってくれた。彼はその時、泣きたいほど大宮の友情に感じた。そして大宮を自分の知己としてその期待を辱めたくないと決心した。二人はお互いに慰めあい、鼓舞しあった。もちろん、ある時に、お互いに手ぎびしく批評しあって腹を立てたこともあったが、すぐなおって、かえって相手の言うことがもつともだと気がつ